



ほけんだより8月



2026年7月31日発行
まゆみの里保育園

本格的な夏がきましたね。当園でも水遊びで楽しそうにはしゃぐ園児の声が聞こえています。皮膚トラブルのある子ども数名みられています。外用薬を塗るときは患部より一回り大きめに皮膚がデカデカする程度にしっかりと塗りこむと効果的です。熱中症に気を付けながらひと夏の思い出作りを楽しんでくださいね。

～発熱について～

毎年この時期は夏の感染症で発熱するお子さんが増えます。発熱時の捉え方についてお知らせいたします。発熱とは体の中で免疫細胞がウイルスや細菌と戦うために起こる大切な防御反応です。

熱が高いと心配になりますが、免疫細胞が活発に働いているというサインです。そのため熱が高いからといって無理に解熱剤を使用する必要はありません。

解熱剤は病気を治す薬ではなく、熱による辛さを和らげるためのお薬です。

熱があっても水分がとれ眠れていれば必ずしも使う必要はありません。発熱時は胃腸を休ませるために無理に食べさせなくてもかまいません。水や麦茶、経口補水液やジュース、スープなどが飲めていれば様子を見て大丈夫です。また解熱剤で一時的に熱が下がっても体内に病原菌が残っていれば、薬の効果が切れると再び発熱することがあります。根本的に病気が治ったわけではありませんので登園は控えてください。

解熱剤は熱によりぐったりして水分もとれない、寝ることもできないなど辛い症状を和らげる一時的な処置として使用しましょう。

～解熱後 24 時間ルールについて～

当園では解熱後 24 時間経ってからの登園をお願いしています。例えばお昼の 12 時に平熱に戻った場合は翌日のお昼 12 時までには 24 時間経過していないので登園できません。**解熱した後は体内では炎症反応で細胞が傷ついた状態にあり、いわば山火事のあとと同じような状況になっています。**傷ついた細胞が元に戻るのに 24 時間ゆっくり療養する時間をとることで鎮静化させ再び悪化することを防ぐ意味があります。

お子さん本人の体調が回復し、食事や睡眠が普段通りにできるようになれば集団生活ができる体力が戻ったと判断できる材料になりますので、ご協力のほどよろしくお願いします。

夏かぜ



大人の夏かぜは症状が穏やかな場合が多いのですが、子どもの場合は症状が重くなることがあります。

この時期に流行するのは『プール熱』と呼ばれるアデノウイルス感染症や、口内炎のできる『ヘルパンギーナ』、手・足・口に水疱ができる『手足口病』などは、子どもがかかりやすいウイルス性の夏かぜの代表格で、症状の変化に注意が必要です。特に今年は全国的に手足口病が流行しました。

また当園では未満児クラスに下痢症状がみられる園児が多数いました。

これらの病気は特効薬がないため症状が落ち着くまでは療養することが大事です。

4月～6月の病気報告

ウイルス性胃腸炎…6名

突発性発熱…2名

水痘…1名

他に発熱、鼻水、咳、下痢症状などが多数みられていました。



6月の歯科検診結果

虫歯ありと指摘された園児数

ひよこ…0名 あひる…0名

うさぎ…1名 りす…1名

ひつじ…1名 きりん…3名

他に噛み合わせの問題や歯の形成不全がみられると指摘がありました。

